
マフィアな国、ですか？

翡翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マフィアな国、ですか？

【NZコード】

N7125V

【作者名】

翡翠

【あらすじ】

普通の世界で暮らしていた、葵、彩花、京次、雅人の四人。ある時、四人はパラレルワールドに飛ばされてしまつて…
飛ばされたのは「ヘタリア」のキャラクター達がマフィアとして過ごしていた世界でした！四人は元の世界へ変えるのか…？

キャラ紹介？（前書き）

翡翠です。

この話にはマフィアな国達がでてきます。
オリキャラがたくさん出でます！（しかも捏造国家じゃないです）
嫌いな人は見ないでください！

キャラ紹介？

オリキヤラ

【ヘラ＝ヴァグナー】（重本しげもと葵あおい）

武器* 拳銃（ルガーポ38）

歳* 14 性別* 女性 一人称* うち、俺

仲良し四人組の一人。かなりのアニメ好きで、テンションが上がると奇声を発する。イレーネ（彩花）とはアニメ友でもある。アイザック（京次）、に対してはかなりの信頼を置いており、ヴィタリ（雅人）、イレーネの年上組（特にイレーネ）に対しては、忠実。ヘタリアは結構愛読書。一人称がうち、又は俺なだけあって時々男っぽくしゃべる。ってか性格が男っぽく変わる。

【アイザック＝ポリヤコフ】（杉成すぎなり京次きょうじ）

武器* 拳銃（トカレフTT-33）

歳* 14 性別* 男性 一人称* 僕

仲良し四人組の一人。のほほんとした性格をしており、四人のまとめ役その一。ヘラ、イレーネのようにアニメ好きではないが、アクションゲームとかは好き。ヘラとはいろんな場面で相棒となり、行動する。ヴィタリに對してはヴィタリと毒舌対決が出来るほど毒舌。仲が悪いわけではない。イレーネは、普通に先輩として尊敬している。ヘタリアはヘラがしゃべってるのを聞いたことがあるな〜ぐらい。

【イレーネ＝シェーンハイト】（木原きはら彩花あやか）

武器* 突撃銃（G36）

歳* 15 性別* 女性 一人称* 私

仲良し四人組の一人。結構ハキハキと物をいい、物事をきちんと組み立てて考える。四人のまとめ役その二。ヘラのようになにアニメ好

き。まとめ役である反面、ヘラ、アイザック、ヴィタリの三人をよくからかって遊ぶ。ヘラにはかなり慕われており、歳が一つ違うなりにとても仲が良い。からかうことはあってもからかわれることは少ない。ヘタリアは読んだりして、好きだけどヘラほどではない。

【ヴィタリ＝オルグレン】（静谷 雅人）
しずや まさと

武器＊長剣

歳＊15 性別＊男性 一人称＊俺

仲良し四人組の一人。悪知恵が良く働くので、危機を脱出しやすい。からかわれるよりからかう方が好きだが、イレーネには適わない。よく揚げ足を取られてしまう。アイザックに対しても毒舌。仲が悪いわけではないし、むしろ仲はとても良い。お互い慣れているので相手から言われた毒舌に関してはほぼへこまない。ヘタリアはイレーネにちょっと聞いたことがある。

キャラ紹介？（後書き）

次もキャラ紹介です。
とりあえず失礼します。

キャラ紹介？（前書き）

キャラ紹介その2です。

最初から四人が飛ばされた世界にいた方々です。

キャラ紹介？

【ローゼ＝ベレスフォード】

武器* 拳銃（ウェブリー＆スコット M1909）

歳* 20 性別* 女性 一人称* 私

アーサーのパートナーとしてR・Rや、遮那を追つている。アーサーのパートナーの所為なのか、ツンデレで料理がヘタ。（とっても食べれないほどではない）責任感と正義感が強く、自分なりの考えを普段からもつて行動することが多い。

【藤里杏奈】

武器* 拳銃（9？拳銃）

歳* 20 性別* 女性 一人称* 私

菊と耀に拾われて以来、二人に拾われた他の三人とともに成長。成長してからは、「遮那」の一員として五人と一緒に戦う。真面目な性格をしており、勇洙が起こす行動によく突っ込みを入れる。梅（台湾）とは気が合い、一緒に買い物に行ったりする。

【シルヴェストロ＝カーテイス】

武器* 短刀

歳* 26 性別* 男性 一人称* 僕

ちょっと弱気になる時がある、ロヴィーノのボディーガード。普段は普通。へラとは気が合うところがあるらしく、仲良く喧嘩する。ソティリオの双子の弟で、そっくりだが、色々と正反対。右頬に十字の切り傷がある。

【ソティリオ＝カーテイス】

武器* 短刀

歳* 26 性別* 男性 一人称* 僕

シルヴェストロの双子の兄で、結構強気な性格。フェリシアーノのボディーガード。よくシルヴェストロやフェリシアーノ、ロヴィーノ、ルートヴィッヒのことをからかって遊ぶので、へラやギルと

よく協力して人で遊ぶ。

キャラ紹介？（後書き）

これで捏造キャラは終了…だと思います。
次回は組織名について書きます。

ちなみに、台湾は梅、香港は涛で行きます。

組織名紹介（前書き）

組織名紹介です。一話分ぐらいあります（汗

組織名紹介

【R・R】アール・アール

正式名称Ross o・Rot。四人が飛ばされた世界で活動しているマフィアその一。ヘタリアの国達で言えば、ヨーロッパのメンバー（例外あり）が主。ボスはフェリシアーノ・ヴァルガスとロヴィーノ・ヴァルガスの二人。ボスが平和主義のため、R・R自ら他の組織を挑発することはないし、一般人にも手を出さない。薬とかも売らない。マフィアと呼べる存在なのか怪しいが、一応マフィアとして活動する。

【遮那しゃな】ジラーニヤ

マフィアその二。ヘタリアの国達で言えばアジアのメンバーが主。ボスは王耀。必要とあらば他組織を挑発するが、やはり一般人には手を出さない。駆け引きが得意で、自分達を守るために、気に入った組織とは同盟を組んだりする。幹部がボスの家族（養子・義兄弟）で主に構成されてあるというちょっと特殊な組織で、永い間続いている。

【H.O.J】

マフィアその三。旧ソビエト連邦が主。名前の通り、自分達の目標のためならなんでもする。他の組織とは関わろうとしない。邪魔であれば誰でも消す。
、という名前は、実は「欲望」の他に「願い事」を意味する。ボスはイヴアン=ブラギンスキ。上記一つの組織と違い、「完全なる悪の組織」として恐れられている。しかし、本当の目的は…

【H.O.J】

正式名称Hero of Justice。個人的な探偵事務所。

北米三人が経営している。誰が上司で、というのは無いがはじめたのはアルフレッド＝F＝ジョーンズの為、形式上アルフレッドを社長、としている。現実的な探偵事務所でする事（浮気調査など）をせず、小説に出てきそうな探偵の仕事のみを受け付けるので、あまり儲けることはできない。

【Secret Police】

マフィア達をとりしまるための警察。中立兄妹、ヨーロッパ（例外）等が主に居る。上司は他に居て、国達は刑事。国達は自分達の國を守るために行動するが、上司から理不尽な命令が下ることも。それでもしぶしぶ納得して命令を遂行する。アルフレッド達はもともとどこに所属していたが、上司の理不尽な命令に対し反発。警察を抜けた。

【Tamilik】

依頼とあればなんでもする万事屋。地中海三人で経営している。今はR・Rや遮那、HOJの協力で稼いでいる。リーダー的存在はサディク＝アドナン。依頼をしに行つた時高確率でリーダーとメンバーの片方が喧嘩しているため、おとなしいもう一人のメンバーに依頼内容を伝えることが多い。しかし、依頼遂行時は息ぴったりに素早く、的確にこなしてくれる。

組織名紹介（後書き）

まとめてる最中で「」ちゃになりました。
分かりにくいかもしれませんが
なんとなく本文の方で分かってください（え
メンバーは本文中で早めに出していくので：
だいたいどこに誰がいるかわかると思いますが…
後、北欧、アジア（日本、中国周辺以外）はでて来ないとおもいま
す。

プロローグ（前書き）

ようやく本編突入です（汗

プロローグ

何故俺達なんだらうつか。

どうして俺と は向かい合つて互いに銃を向けているのだろ。
きつと、また会つときは分かり合えるよね。
だから、 も、 も生き永らえろ。

俺と彩花先輩は、この賑やかな「マフィア」に属るから。

葵 side

「えーと、ここはどうだつけ？」

「おーい葵。あ、なんかおーいお茶みたいになつた。」「あ、彩花先輩っ！」

「いやー、いきなり非日常に飛ばされたら驚き通り越して楽し一ね。」

「へ？」

きよしきよるとあたりを見回す。あ、部屋の造りがヨーロッパみ
たい。

「あのやーーーーー、バタリアのキャラが出でくるから。驚かないでね
？」

「え。どうにか、」とですか

「いやー、私達中学校に居たじやん？で、四人一緒に倉庫入ったじ
やん？」

そういえばそこで、古くせい本をみつけたよつな。んで、
そこでヘタリアのキャラのマフィアってかつしよせんうつて話し
たよつな。

その直後、本が急に光りだして。それから記憶、は無い。

「まさか……！」

「 そのまさかっぽいよ。」

「 本が光りだした直前にしたのはその話。願い、といふか。
「 私達がしてた話の中で一番願いっぽい話を実現してくれたみたい
だね。」

「 ……マジですか… つて、京次と雅人先輩は！？」

「 一緒に飛ばされたのかも知んないけど… 目を覚ました時一緒に
居なかつた。」

「 そんな…。」

早く見つけて帰らないと… 現実の「ヘタリア」に影響があるかも
しれない。

あれ、一次創作っぽい世界に行つてるんだつたら別にいいのかな。
「 とにかく… 話は後だね。」

カツ、カツ、と誰かが歩いてきたようだ。
俺達はこれからどうなるのだろうか。 つてか
京次と雅人先輩を見つけて早く帰らないと… !

プロローグ（後書き）

本編突入しましたが
ヘタリアキャラ登場は次回からです。
話の切り方が…すみません、がんばります…。

二つ目（前書き）

ヘタコアキャラしかないと（汗）登場ですー。

こひわ。

「目を覚ましたか。」

低い、通つた声。どつかで聞いたことあるような…
ヘタリアキャラで、この声と言えば…

「一人とも目を覚ました所で聞くが、何故こんな所に女子供が一人で居たんだ？」

「ルートヴィッヒだあ～！」

思わず叫ぶ。しかもフルネームで。って、あ。

「何故俺の名前を知つている！？まさか…敵の！」

「あー違います。それはおいおい説明しますから。」

彩花先輩、どーしてそんなに落ち着いてるんですか。

ヘタリアのルートさんじやないすか。皆大好き（？）ルートさんですよ。

「少なくともうちは大好きです！」

「…その連れは急にどうしたんだ。」

「…無視してあげて下さい。私達は、信じられないかもしませんが…他の世界からやってきました。」

「他の世界、だと…？」

「まあ、信じられなくても普通だと思います。」

そういうと彩花先輩は立ち上がる。

「迷惑だとは思うので、ここを立ち去つて帰る方法を見つけたいと思つていますが。」

「しかしだな…俺達としても怪しい奴をそのまま帰すわけにはいかんのだ。」

やつぱマフィア、なのかな～、服装もスーツだし。

そうこうしていると、もう一つの足音が近づいてきた。

「おーいヴェスター？ 目覚ましたか？」

「あ、ああ兄さん。だが少し問題が発生してな。」

…ドアから登場したのは…お分かりであつて、ギルベルト。

「くあ わせひーf t ちよふじこーか」

「あ、葵が壊れた。」

のんびり実況しないでください。ルートはギルにその間にこままで話をしたらしい。

「面白えじやねえかー」こいつら、ここに置いたのは…「せひー

「な、に、兄さんつ！？」

「どーせお前ら行く所無いんだろ。外で困らせるのも悪いしな。」

「…ところで。あなた達は何を？」

なんとなく、とこづか推測で分かつてたことだけど、聞いてみた。

「R・Rって言うマフィアだけど？」

やつぱり。ですよね 誰が居るんだ。

驚きナシか。…お前ら、「俺達」の事は知ってるんだろう？

「え…はい。」

「それなら最初はそれを教える。その後の話は後でしようぜ。」

流石軍事国家なのか、うち達の反応できひに事情を推測したギル。

…普闊なんていってサー・セン。

「まずは、私達の知つてることから。あなたは、『ルート・ヴィッヒ』

。そつちは『ギルベルト=バイル・シュミット』ですね。」

「正解。俺達の事、そつちではどうこう風になつてるんだ？」

「『ヘタリア』って言う漫画に出てて、ルートはドイツ、ギルはブ

ロイセンって國の化身つてことになつてます。」

「ふむ。…國の化身か。」

そう言つて腕を組むルート。敬称なんてもう付けられません。

「敬称は善処します」

「…」

調子に乗りすぎました。冷たい目線…

「ま、この子はほつといて。次です。」

「今度はこちらだな。」

「俺達はマフィアだ。それが事実だからな、悪い事はしてません、

なんて弁解するつもりはねえ。だけど、仲間は守る。そんな組織が

このR・Rだ。」

ギルはそう言つと、不意に表情を硬くする。

「これから先に踏み込んだら…少なくともこの世界ではまともに生きていけない。それでもいいんだな？」

うちと先輩、一人でうなづく。少なくとも、この人達についていかなければ、

帰ることの出来るきっかけはつかめないと思つ。

それに、情報通のマフィアだから、京次と雅人先輩を見つけるのも早いと思う。

「なら、話すぞ。これがこの国の今の状態だ。」

ギルは、ゆっくりと息を吸つた。

いちわ。（後書き）

ヘタリアキャラが出てくれました。
しかし主人公ではなく芋兄弟…
作者はルートヴィッヒが大好きです。

二〇。 (前書き)

ほほくタリアキャラは芋兄弟しか登場しません。

「UJの国には二つ三つのマフィアが存在している。」

「それが俺達『R・R』と、『遮那』と『

』だな。

まあ、行動がまったく違えけどな。」

ギルは目を細めている。何故かは分からぬが、怒っているようだ。

「兄さん、この一人には説明しないと分からぬだろう。」

「…ああ、そうだな。さつきも言つたが、悪いことはしてません、なんて言い訳するつもりはねえ。だけどな、『 のやり方は気にくわねえんだ。』

「…そのボスの名前とか分かります?」

「ああ。分かるぜ。『イヴァン・ブラギンスキ』って言つ。あと、

敬語はもうやめる。」

「いや、ごめんなさい。なれないんで…。」

ボスの名前、イヴァン。国名は、ロシア。

「あいつらは一般人にも手を出す。俺達と『遮那』は一般人に手を出さないつてのが暗黙のルールになつてんだが…。」

「遠い国ではそれがマフィアと聞くのだが…、どうもそうはなれなくてな。」

だけど、ロシアってそんなに悪い国だと私は思つてない。

純粹故の黒さ。それがロシアで、だけど、

私が知つてゐるロシアは、皆と友達になりたかつたはず。そんなに悪い人になつてゐるとは思ひがたい。

「まあ、それが俺達の国のマフィアだな、後は…、」

「『HOJ』、『Secret Police』、『Tamilic Police』だな。まあ、それぞれ一言で表すと、『探偵』、『警察』

、『万事屋』だな。『HOJ』と『Tamilic Police』は時々協力してくれるのだが…。」

『『Secret Police』』はマフィア専門の警察でな。アーサーって奴とバッショウて奴が半端無くしつけーんだよ。」
そう言つとギルは溜め息を吐いた。

「そんなに怖いんだ。

「とりあえずそんな感じだな。ここまで、とか言つてもむつと詳しく述べはできるのだが…、後戻りは出来ないぞ?」

「大丈夫です。ねえ、葵?」

「ええ。俺は大丈夫です。」

「二人ともなかなか根性あんじやねーか!よつし、じゃあフェリちゃん達のどこ行こーぜ!」

ああ、ここにはフェリ居るんだ…つてことはロヴィ達も居るかな

「ところで、ここのはボスって誰なんですか?」

同じ疑問を思い浮かべたようだ。

「ここのはボスか、それならフェリちゃんとお兄様だぜ?」

「(某馬鹿騒ぎの…ジャジー的な!)」

うん、きっと今二人とも一緒に事考えてた。
まあいいや。折角ヘタリアの皆を見れるんだ。

「ひちだぜ、一人とも!」

「そう言えば、名前をちゃんと聞いていなかつたな。一人とも、名前は?」

「私は木原彩花です。」

「うちは重本葵!」

うん、敬語は無理です。今現在彩花先輩だけです。使う人は。

「…『遮那』の構成員達と同じような名前なのだな。『R・R』では少し不便だから…偽名、いるか?」

「おっ、おもしろそうだな!じゃあ俺達から一人ずつ偽名つけてやんよ!」

「…兄さんに一人とも任せつもりだったのだが。」

「つれねえ事言つなつて!んじや。俺は彩花な!』イレーネ・シユ

「ンハイト』これどーよ…」

「なら、俺は葵か。…『クラ・ヴァグナー』でどうだ?」

意外な提案により、この世界での名前をつけてもらつた。

なんか嬉しい。

「ありがとうございます。」

「いいつていいくて。んじゃ、丁度部屋見えてきたから入ろうぜー。」

扉に向かつて指を指したギルは、多少乱暴にドアをノックした。

「入つていーよー」

中から、のんびりした声。確かにそれは、うちらの世界で言ひ、

『ヘタリア』の主人公、イタリア・ヴェネチアーノ」と、『フェ

リシアーノ・ヴァルガス』

二〇〇九（後書き）

途中の某馬鹿騒ぎ、元ネタは分かつたでしょうか？
次からヘタリアキャラをどんどん出して行きたいですね…！

せんわ。 (前書き)

ぶ、文章が「ひがひがひが」に…
次から立て直しますつ (汗)

さんわ。

「失礼するぜーー！」

部屋の中には、さつき返事をした、フュリシアーノ、そしてもう一人のボスロヴィイーノ、アントーニョ、ローデリヒ、エリザベータの五人が居た。

あと、そつくりな双子っぽい人が一人。「ヘタリア」の登場人物じゃないと思うんだけど。

「ようこそ。ここに部屋に来たって事はこっちの…「裏」の世界に入る決意が出来たって事だよね、お一人さん？」

「ええ。」

「うん。」

大きくうなづくうちと先輩。

「なら歓迎するよ、『ペラ』、『イレーネ』。…葵と彩花、つて呼んだほうがいいかな？」

「もしかして…あの部屋には監視カメラとか…あつたんですか？」

「もちろん!」

さつきの会話は全て聞かれていたようだ。と言ひことは、もう説明は無しでいいと。

「で、聞きたいことがあるんだけどね?」

「なんですか?」

「一緒に居たのは四人、って言つてたよね? あともう一人は?」

「分かりません。一緒にこつちへ来てるのかも、全部です。」

「じゃあ俺達も探すの手伝うから! あと、ギルベルトも言つてたけど、本当に敬語は無しでいいよ、つてかこれ命令! 君達も今日からここの一員だし!」

フヨリはそう言つと、にこり、と笑つた。

十数歳の私達をこのマフィアに入れる、という方向に話が向かっているのは、あの本の能力かな。

「自己紹介、とかは君達は知ってるから良いよね。とにかく君達今何歳？」

「私は15歳です。」

「うちには14歳つす。」

それを聞くと、フューリーは少し考え込む表情になつて、「うーん…、俺ちょっとと考えたいことがあるから、ルート、ギルベルト。一人を案内してきて~」

と言つた。

「ああ、分かつた。」

「んじゃ行くか。へラ、イレーネ、こつちだ。」

二人に続いて部屋を出て、少し薄暗い廊下を歩く。さつき、フューリーしか喋つてなかつたけど…、やつぱり少し皆違つのかな。

つてが、フューリーちゃんが考えたいことつて何だろ？

「おい、へラ、」

「ぶツ！？」

ルートの呼ぶ声が聞こえたかと思つと、盛大に柱に顔をぶつけた。

「おい、大丈夫か？」

「あーだ、大丈夫：。」

目の前がチカチカして、本当はあんまり大丈夫じゃない。

まあ、それもすぐに収まるだろうから。「大丈夫」と答えた。

「なら良いが。ぶつけたのが頭だからな。具合が悪ければすぐ言つんだぞ？」

「はーい」

さつきのような痛い思いをするのはもう二度三度なので、考え方をするのをやめた。

そこから少し歩いていると、隣り合つ二部屋の前に着いた。

「ここを一部屋づつ使えばいい。」

「え？」

「俺達、ここに幹部は大体ここに住み込んでいる。どうせ住む所も

ないだろ？」「

正直、あの本（？）の効力がここまでは思つてなかつた。
本当につけ等はこの「マフィア」の世界に足を踏み入れなければ
ならぬいらしー。

…〈タリアキャラガ〉いるから、帰りたい気持ちもあるけど、歓迎
の気持ちも強い。

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもいいおつか。ねえ、葵。」

「そうですね。先輩。」

「ijiは少し狭いが、我慢してくれ。あと、困ったことがあればす
ぐに俺達に言つてくれればいい。」

「分かりました~」

「それでは、また呼びに来る。それまでゆづくらしていくぞ。」

「はい」

…返事したのは良いけど、なんか忘れてるよつた。

「一人樂しそぎるぜ~」

「に、兄さんつ…?」

あ~、ギルのこと、すっかり忘れてた。

「あんまり一人を困らせるな!ほら、行くぞ!」

「待てよ、ヴァエスト…」へラ、イレーネ、後でなつ…」

歩いてもとの道を戻る一人の背を見て、うち等はこの世界で
やつと心から笑えたような、そんな気がした。

よさん。(前書き)

すこしせりコアス(?) 有りです。
やつと顔が喋つてくれた…!

よんわ。

「へラ、今良いか?」

「はーい」

ドアがノックされ掛けられた声。ルートのものだ。

「フェリシアーノが呼んでいる。イレー・ネは兄さんと先に行つているからな。」

ほんの数分前に歩いた廊下を、今度は一人で通る。足音しかしない静かな道は、少し気まずかった。

「…へラ、お前はセートルクス・ヴァルガスの事を知つていてるか?」

「(ヴァルガス…フェリヒロヴィーの…関係者?)いや、わかんない。

「フェリシアーノの祖父だ。…そして、このR・Rの初代ボスだ。」
フェリシアーノの、そしてロヴィーの祖父なら、知つてている。

それは、きっと。

ローマ帝国。ならば、その隣には。

「いつも隣には俺の父が居た。俺は、何度もあの人と父に助けられてな。アントニー達はあの二人に拾われているんだ。」

「前言撤回。セートルクス・ヴァルガスをうちは知つてゐる。そして、ルートの父も。」

もし、この世界もうち等の世界と似てゐるなら。

「二人は、消えてしまった?」

「ああ。ある日、突然な。何も言わず、消えてしまった。」

やはり。だけど、この世界がうちの願望で出来てゐるなら。

「きっと、いつか戻つてくるよ。若かったでしょ、一人とも。」

「ああ。歳相応には見えなかつたし、元気だつたな。」

そうこう話しているうちに、ボスの部屋の扉の前へとついた。

「入るぞ、フェリシアーノ。」

「うん、いーよ。」

ガチャヤ、と扉を開き、フヨリとロヴィの前、先輩の横へと進む。
「ごめんね、ずっと考えたんだけど…。へラ、イレーネ。俺達と仕事してくれないかな？」

「…え、」

フヨリが言つた「仕事」。内容はどんなものなのかなはすぐに想定できた。

あの古びた本は、うち等に戦え、と言つてゐる。この世界で。

「私達は、未成年ですよ？」

「だけど、俺達には必要なんだ。」

「無理にとは言えねえがな。お前達が嫌ならいい。」

ロヴィがフヨリの後を続けて喋る。

「なら私達はやめ、「先輩。」…葵？」

「仕事、やりましょう。」

「葵…？でも私達は何も出来ないし、なにより危険、」

「ここで行動しなければ…帰れません。なんか、直感ですけど、分かるんです。それに、あの一人も見つけやすい。危険なのにも変わりありません。ここに来てしまった時から、ずっとうち等は危険です。」

そう、私達がここで暮らしているだけでも。

「弱い者は狙われる。何もしていなければ弱いまま…ですよね、ボス。」

「うん。残念だけど、そうだね。」

「ああ。そうだな。」

ボス一人が頷く。

「確かに… そうかも知れない。ここで生きていくんだから覚悟は決めろつて事かもね。… 私も、その仕事、受けるよ。」

「ありがとう。本当はありがとうもいえない立場だと思つんだけどね、今の俺。」

「まあ、ありがとうな。… おい、お前ら別に話しかけても良いんだぞ？」

「いやーだつて話しかけたら空氣読まん奴みたいやん?」

「あなたは普段から空氣を読めていませんよ、この御馬鹿さん!」

「まあまあ、ローテリヒさん、落ち着いてください。二人が驚いてますから。」

わいわい、がやがや。一気に部屋が騒がしくなった。

「ヘタリア」の世界と違つんじやなくて、単に喋つてなかつただけか。良かつた。

「皆面白いでしょ。ところで、早速一つ仕事を頼みたいんだけど…」

よんわ。（後書き）

というわけで、ローマ帝国人名は「セートルクス・ヴァルガス」です。

はいそこ、ネーミングセンス悪いとか言わない！
こまかい設定は、後々決めていこうと思います。

あと、一人才オリキャラ増えるかもしだせん（これ以上！？）
取りあえず次回は、他陣営の方が何人か出ます。

11. オガ（前書き）

他陣営、やつと登場ですー。

「へラ、逃げるだつ！」

「了解！」

「待つのである……」

「うちとルートは「仕事」の最中。後からsecret Police」と言われる、警察の一員…

というか、バッシュが追つてくる。

ルートの後に走り、一人で逃げる。

「（……なんでこんなことに……）」

始まりは、昨日の「仕事手伝つ」発言以降。

「早速なんだけどさ、へラ、ルートと一緒にしてもらいたい事があるんだ。」

「本当に早速ですね……。」

「今日決まつたんだよ、ちよつといい仕事のはずだし、やつてもらえない？」

内容は、銃をR・Rのメンバーから受け取り、11:15まで持つて帰つてくる、というもの。

今日決まった、と言つのもあり、危険は少ないらしい。

…少ないらしい。

「本当は危険無いよね、うん、相手がバッシュじゃ無ければ……！」

「ヴェスト、へラ、乗れ！」

逃げていく先には、ギルが乗つた黒い車。運転席からギルが叫んでいる。

「逃がさないのである！」

セッダーン！バッシュ独特の銃声。

今撃ちましたよねw容赦ナシですか。

「あいにくと…、捕まっている時間も趣味も無いのでな！」

「うおわ！？」

ルートに手をぐんつ、と引かれ、車に乗り込む。

ドアを閉めた瞬間、ギルが車を発進、バッシュはすぐに見えなくなった。

「Danke 兄さん。」

「ああ、大丈夫だったか？」

「なんとか。それにしてもsecret police、動くの早くない？」

「それのことなんだが。さっきフエリちゃんに連絡したら、HOJに行けって。」

「HOJ？ 何の組織だろ？」

「今から直行するからな。」

そこは、よくある探偵事務所のようなところだった。

「Hello フエリシアーノから聞いてるよ。ルイス、ギルベルト。…で、君は？」

出できたのはアルフレッドだった。

と言うことは、マシューも一緒かな？

「こいつは、ヘラ＝ヴァグナー。新しい仲間だ。」

「ふうん… そうかい、奇遇だね。丁度俺の所にも新しい子が来たんだぞ。」

アルは、そう言うと少し困った顔をした。

「それにして複雑だな。R・Rは悪じやないけど、」

「マフィアはマフィアだから仲間が増えるのは、だろ？ ま、気にすんなって。」

「ま、それもそうだね。」

「アル？ そろそろ依頼を…」

奥から現れたのは、予想していた通りマシューだった。

新しい子ってだれだろう。

うち等は事務所の中へと入ると、椅子にこしかけた。

「それで、今日は何の用事だい？」

「Secret policeのことなんだが……。」

「…あそこがどうかしたのかい？」

「突然決まった仕事があつたから、今日そこへ行つたんだが、待ち伏せされていてな。」

ルートとアルが話し始める。話は聞いているが、少し暇だ。
「これ、どうぞ。」

マシューが、コーヒーを注いで持つてくれた。

コーヒーは苦手だが、折角なので飲むことにした。

「銃は受け取れなかつたし、何か知らないか？

「確実に密告されるけど…、ここら辺には邪魔をする奴なんて居ないだろ？？」

「ああ。それだから余計分からないんだ。」

確かに、アルが味方しているぐらいだ。ギルも言つてたし、悪いことは何もしていないはずだ。

まあ、一般人を殺したり、怪我を負わせない、と言つてたが。
「何か情報が入つたり、分かつたりしたことがあつたら教えてほしい。」

「分かつた。調べてみるよ。」

話がつき、帰ろう、とルートが言い、うち等は立ち上がった。

その瞬間、

「ただいま！」

聞き覚えのある、声がした。

11. わ。(後書き)

バッシュュ、アル、マシューが出てきました。
次は他のキャラも出していきます。

さくわ。 (前書き)

二人の内の一人。登場です！

うくわ。

「ただいまー」

その声は、

「ああ、密語たのか。お、ルートヴィッヒにギルベルトじゃねえか。
後…誰だ？」

確かに聞き覚えあるけど、キューバさんの事じやない。

「ああ、ヴェーバーか。こいつは…へラ？」

「なんで…お前、」

「それは…」うちのセリフですよ…雅人先輩…っ！」

四人の内の一人、雅人先輩だった。

「まさか…へラ、例の二人の内の一人か？」

「そう…。」

「何でお前へラって言われてんだ?…ああ、そういうことか。」

「ヴィタリ、君…知り合いなのかい?」

アルは先輩の事を「ヴィタリ」と呼んだ。と言つことは、先輩も

偽名を貰っているのか。

ヴィタリ…アメリカ名かな？

「ああ、ごめん。説明してなかつたな。アル、こいつは、俺の後輩だ。」

「どうこうことだい？君は…一人で居ただろう？」

「…本当の事を話す。ああ、葵、そっちの顔は聞いてるのか？」

「はい。」

「『』めん、ルイス、ギルベルト。今日は帰ってくれるか？」

「ああ。」

ルートが頷いた。それを合図についで、ギルも立ち上がり、事務所を出た。

「…帰りますか。」

「ああ。後でもう一度連絡を取ればいいだろ。」

「…アルは嘘、とかあんまり好きじゃねえからな…」

アルフレッド、ヘタリアでは「英雄」にこだわっていた。

国と言つ立場でも、今の立場でも嘘は嫌いなのだろう。英雄だか

だから、人一倍嘘を吐くのが嫌いで、（冗談ならまだしも）

人一倍嘘に敏感なのではないか？

「喧嘩しないといいけど……」

とりあえず、雅人先輩の事を報告しようど、うち等はR・Rへと
帰つた。

「…ヴィタリ、君は俺に嘘をついていたのかい？」

「…ああ。」

「信頼してくれてると思ったのに、隠してたのか！？」

「アル、ヴィタリも事情があるんだよ…、」

「俺の事を知ってるなら…嘘をつくのも、吐かれるのも嫌いって…
知ってるだろ！？」

信じてもうえないと愚ったから、黙つてた。

それは俺の責められるべき失態。

三人は確かに、見ず知らずの俺を信頼してくれていたのに。

「ごめん。」

「出て行つてくれ。」

「アル…！？」

「アルフレッド、おめえ…いくら何でも…」

覚悟はしていた。アルフレッドは、信頼していいはずだったのに。覚悟はしていた。アルフレッドは、信頼していいはずだったのに。

「いいぜ。すまなかつた。」

それだけ言って、俺の部屋となるはずだつた場所を訪れ、荷物をまとめた。

そこには、アルフレッドとの相部屋。

「…一回でも、仕事してみたかったな、面白そうだつたし。」

たつた一日だけど、確かに楽しかつた。

元気一杯なアルフレッド。

優しいマシュー。

兄貴肌のヴァーバー。

「じめん、嘘なんか吐いて。」

聞こえる事は無いだらう言葉を吐いて、俺は荷物を背負つた。

元の世界に返りたいはずなのに、皆と一緒にのときは、その気持ち

が薄れ掛けていた。

「本当に……やべえんだろ? な……」

この世界にこじんじと自体。

だけど、確かにここに存在できた事が、嬉しかった。

うへわ。（後書き）

と言つわけでキューさんの人名はヴェーバーです！
ネーミングセンス？何それ美味しいの？

といふか他に言つべき事があると思う。私には。
雅人…この世界に馴染むの早すぎだろw
あ、いや、雅人だけじゃないけど…。

ななわ。（前書き）

口調が分からぬキャラが何人かいります……ね。

ななわ。

「あ、やべ……懐かしむもんじゃねえな……一日なのに……」

あれから一十分ほどが経ち、ようやく準備が出来た。

「でもこれからどうに行こうかな~」

三人へ手紙も書いたし、後はコレを俺の机に置いてここを出よう。
「…たつた…一田のはずなのこ…なんでこんなに嫌なんだろくな、
ここを出るの。」

アルフレッドも、マシューも、ヴォーバーも本で見たことあると
は言え、話したことも無かつたのに。

まあ、漫画の世界の住人だから当たり前のことなのだが。

飛ばされてきた俺を、当然のよつて受け入れてくれた三人。

「俺らしくねえな…よし、行くか。」

手紙を置いて、部屋を出ようとする。瞬間、

バンッ！…と音がし、ドアが壊れそうなほど勢いよく開いた。

「ヴィタリツ…いるかい！？」

「アル…？」

ドアを開いた人は、アル。これから出る部屋の、持ち主。

「ああ…遅くなつてすまん。今から出るよ。」

「待つてくれー！こっちも頭に血が上りすぎて酷いことを…」

「救つてくれたあんた達を信じない、なんて酷いことをしたのは俺の方が先だろ？」

「だけど君は謝つてたじやないか！俺はそれも無視してた…」

必死に、アルは叫ぶ。

「じめん、ヴィタリー！ここに歸ってくれー！」

「…でも、俺は…」

「いいんじゃねえか？」

「いいとりますよ。」

ドアの影からマシューとヴォーバーが現れた。

「アルフレッドがここまで言つてゐるんだ。素直になるつて囁つのも手だと思つぜ。」

「それに、僕達は貴方にここまで話してほしいんです。」

「…ありがとうございます、ヴォーバー、マシュー。」

「「あ、アル（アルフレッド）がありがとう（だと）……！」

「な、なんだい！？失礼な！」

そんな光景を見て、俺は笑った。

「君も笑わないでよ！」

「悪い……つ、くくつ……」

少し笑いをこらえながら、アルを見る。

アルは、少し拗ねながら、俺を見返してきた。

すつ、と息を吸つて。

「『君がよければ、俺達と一緒に探偵やらないかい？』」

それは、昨日のアルが俺に言った言葉。

「『ああ、いいぜ』」

それは、昨日の俺がアルに言った言葉。

だけど、意味も、心境も全然違う。

今度は、互いが互いを信頼して。

「良かつたですね、ヴェーバーさん。」

「つたぐ…世話のかかる奴らだぜ。」

嬉しそうに笑うマシューと、呆れたように笑うヴォーバー。

二人共、ありがとう。

「よし、そつと決まつたら、仕事だ！」

「アル、その前にルイスに連絡取らないと。」

「ああ、そつだつたね。じゃ、俺は連絡してくるから。」

そう言つと、アルは廊下へ出て行つた。

「ヴィタリ、これからもよろしくね。」

「一緒にがんばりやせ!」

一人は、俺にそつ言つて、手招きをした。

行く場所は、探偵事務所に使つている部屋。

一人の後を、俺は言葉に表しにくい嬉しさを心に持つてついていった。

ななわ。（後書き）

キューさんの口調が分からない……！
間違つてたら、めんなさい。

それにしても……仲直り早い！そしてなんか繰り返し……！
すみません。

はひわ。（前書き）

ローテーション方式崩してこっちから更新。
…ネタがこっちの方があつたんですね！

まひわ。

「おーこへラーお前も飲めー。」

「こやこいや無理だつてルートー。つち未成年。」

「ダメだこいつ。ルート完璧に酔つてる。」

それにもうちは色々やばこつて……アルコールはー

「みせーなん?そんなのいいから へいえー」

普段ではルートが絶対「もつたいない!」と叫んで嘆くだけひづ行為

ルートまほしゃん、つじビールをひちにかけてきた。

ヘタリア知識、ドイツでビールがかかるのは日常茶飯事。

せーまほーっ!

そもそもこんな危機に陥つているのは、一時間前のことだ。

「へラ、イレーネ。アルフレッドから連絡が来た。ヴィタリ……あー雅人?はあつちで生活するそつだ。」

「分かりました。」

「今度からかいに遊びに行」。」

なんか先輩の日が輝いている。

雅人先輩、ご愁傷様。

まあ、とりあえず先輩は安心だな。

後は、京次。

「ああ、そういえばフュリシアーノ達が呼んでいたな。二人共、行くぞ。」

フュリの所へなんだろう…と思いつら等は歩いた。

「ああ、よく来たね。二人共。」

「今日お前らの歓迎パーティー開くから腹減らしどけよコノヤロー。」

「あー兄ちゃん、先に言つちゃわないでよー。」

「お前が遅いから悪い。と言つわけだ。楽しみにしどけよ。」

そして、パーティーは開かれた。

で、最初の状況になる。

うちの抵抗(?)もなしく、ビールはつむぎ思つくりかかった。

あー…意識無くなるよー。

血漫じやないが、うちは…ノンアルコールビールでも…酔つ…人だから…。

「ここのやつーやつたなあああー！」

え、葵ー? ここの声…?

私がそっちを見ると、何故か葵とルートヴィッヒがビールの掛け合いをしていた。

「ちょ…ギルベルト、あれ何ー?」

年上の人を呼び捨てにするのはなれないが、ボスの命令だから仕方ない。

「あ? ヴェスト…かなり飲んでるな。めずらしく…自分の暴走気にしてめつたにあそこまでは飲まないのに…あーへりちゃんまで巻き込んで。後で二人共説教だな。」

「なにのんびりしてるのー? 止めないとー!」

「あー無理だ。あーなつたら誰にもとめらんねえ。非難しといった方がいいぜ?」

「…え?」

ギルベルトはすつとルートヴィッヒを見てこる。嘘ほつことないと思うが…

逃げた方が良いって？

「イーネちゃん、ルートは酔つとすりへ暴走するから…」

「まあ、止めようとしたに限つ俺に何はあんまりないかな。怖えんだよマシチラジやがにも。」

「あのお馬鹿さん…まあ、くらは酔つ払つてますから大丈夫だと思こませけど。」

「まあ…やつこうといひが可愛いんだけどね。」

「まあ、あんまつ酷こよひやつたらアマドリつけたるなー。」

「こんなに言われるルートヴィッヒの酒癖つてどんなのなんだか。危なかつたら俺達男に任せて逃げればいいから。」

「…兄貴の言つとおりした方がいい。」

「えーと、ソティリオに、シルヴェストロ?」

「ナウだよ、イーネちゃん」

「ナウ。覚えてくれ。」

そういわれた双子は、大きく違つ反応を返してきた。

双子なのに性格はここまで違つんだなー。

感心しながら、私は、ルートヴィッヒと葵の様子を眺めていた。

まわ。(後書き)

やつとソティリオ&シルヴェストロ登場。
次はこの狂乱宴の続きです。
ルート&ベラの酔っ払い組みを主に。

わざわざ。（前書き）

歓迎パーティー続編です。
全てイレーネ（彩花）視点。

さあうわ。

「 ゑーとおー！びーるー。」

「 ！」にあるゼーーー。」

中学生（それも小学生に見える）とつりになる青年が酔つて肩組んで「機嫌だ。

相当怖いんだけど。

「 イレーネちゃん、ルートとベラちゃんばかり見てないでこいつちで俺と話そー」

なんかナンパらしきものしていく人は居るし。

ソティリオも酒飲んで酔つてるな、これは。

「 ソテイ！イレーネ、困つてるから…。」

「 シルヴェ、お前俺のナンパの邪魔すんのかー？」

「 イレーネの前で『ナンパ』って言つたら意味無い。」

まあ…分かつてたけど、そう思ひ。

とりあえず、双子弟のシルヴェストロが双子兄のソティリオを叱つている間に、

超酔っ払い組みの一人を見ておく。

「あ、何か歌いだした。」

「「「ウ」ストが歌いだしちまつた…！」」

「「「れは…止めないと「ラ」が危険ですね。止めましょうか。」」

「え？止めないんじゃなかつたの？」

「「「ラ」とルートヴィッヒが歌いだしたことで何をそんなに危険視しているの？」

疑問に思つたのでエリザベータさんに聞いてみると「…」した。

「イレーネちゃん、ルート君、ちょっと歌い出したら危ないの。」

「え？」

「うういえばさつまで居たマカロニ兄弟が居ない？」

「ルート君はね、歌いだしてさらに飲んだら…「」が出てくるの」

「え、うなの？」

「まあ「ラ」ちゃんにそんな酷い「」とはしないと懲りけり…」応ね。」

「ああ、だからルートヴィッヒも自分でそれを警戒してあんまり飲まないんだ。」

だけど、今日は私達が来たから…

ちょっと羽田をはずしちゃったんだ。

「そりなんだ…じゃ、私も手伝おうかな。」

「危ないわよ？男に任せたおいた方が…」

「任せてください。」

そういうと同時に、ガッシュヤンーとともにすいこ音。

振り向くと、ルートヴィッヒとヘラが協力して男子組みを退治（？）してくる所だった。

「つづわー」

「ローテリヒさん…あんな危ない」として。仕方ない、イレーネちゃん、協力してくれる？

「え？ いいよ」

さつさまで危ないって私の事を止めてたのに…どうこう心境の変化だらうか。

「ちょっとまつてね」

そう言われたので、少しの間ルートヴィッヒとヘラを見ていた。

相変わらず男性陣が挑んではいるが、酔っ払いの勢いなのか、二

人は止められていない。

「お待たせ。ほんと危ないから実力行使で行くね。」

帰ってきたエリザベータさんの手には、例のフライパン。

「本当はギル専用なんだけど…仕方ないから。ヘラちゃんを止めてあげてくれる?」

そう言ったエリザベータさんと、私は一人が暴れている方に向かっていった。

「お、おい危ないぞエリザー!」

ギルが止めているが、それも無視。

「ルート君、ごめんね」

「葵、先輩命令。」

私達が言葉を発したのはほぼ同時に

エリザベータさんは、次の瞬間フライパンを振り上げて、

ルート、ヴィッヒに向けて振り落とし、カーン!といつ音を響かせた。

葵は私の「先輩命令」で取りあえず止まつた。

そのまま足払いを掛けて、倒れてきた所を私がキャッチ。

「　「　「　「　おおー　」　」　」

男性陣五人の声が重なつた。

とりあえず、一人はそのまま早々に寝かせました。

こここのパーティーは意外と命がけかもしない。

さあうわ。 (後書き)

酔っ払ったルートって本当にこわいです(笑)
Sになつても本当は大丈夫です。

ルートとくらはそつくりな酔い方をする設定なのでw

じゅうわ。(前書き)

十話目突入です！

じゅうわ。

へラ、イレー・ネ達がパーティーの真っ最中。

暗い闇の中、話す人影。

「イヴァン、二つちは済んだよ」

「ありがとう」

話しているのは一人だが、周りには多くの倒れている人が居た。

その服は、どれも同じで、多くの銃が転がっていた。

「……くそつ！」

そのうちの一つが突然起き上がる。そして、

パンツ

銃声が響いた。

「駄目だよ、イヴァンを僕は倒させないから

「僕もやられるつもりは無いからね」

「大人しく、寝てよ」

銃声は、倒れていた一人が持っている銃からではなく。

一人の、背の低い少年の持っている銃から聞こえた。

「……僕はイヴアンさんの騎士だよ。君達には倒せない」

「ま、まさか、お前は、『墮天使の騎士』！？」
フォーレン・エンジェル

「あー、援軍来ちゃったね、どうする、『墮天使の騎士』君？」

「イヴァン、ふざけないでよ。取りあえず、逃げよ！」

倒れている人々の援軍に見つかった二人は、そのまま闇に消えた。

「ま、待て……！」

「やめろ、勝手じゃないッ！」

「くっ、ボスに報告だ！！」

「んー、う？あ、頭が痛い…………！」

「へラ、起きたか」

かなりの頭の痛みに、意識はすぐに覚醒した。

でも、じじじ？

「ルート、じじじ？」

何故か隣に居て、苦い顔をしているルートに聞く。

「『』の部屋はまあ、なんだその、説教部屋だ」

「へ？」

「すまん、へラ、昨日のこと覚えてるか？」

「え？ 昨日？……あー」

昨日の暴走を思い出した。何かすんません。

それにしても結果的に女子陣一人でつかうち一人を止めたよね。

すげくね？

「俺がビールをかけたのが原因だ、すまない、謝る」

「あー、うちもちゃんと言つてなかつたから。つか、ノンアルコール
ビールとか、『』もビールとかでも酔つんだよ、なんでか解らない
けど」

「……そなうのか」

会話を続けていると、一人分の足音が響いた。

その足音は部屋の前で止まり、そして扉が開いた。

「元気か？ヴェスト？」

「起きたね、ヘラ。」

扉から出てきたのは、ギルと彩花先輩。

二人共にこやかな良い笑顔だ。

良い……笑顔ですね（現実逃避）

ルートはギルに、つちは彩花先輩に。

それぞれ思いつきり怒られました（あまりにも怖すぎて現実逃避2）

「兄ちゃん、」

「聞いた。ジラーイのボスと付き人自らか……」

「これは喧嘩売られちゃつたってことでいいのかな？」

「多分な。だけど、慎重に行動しないと」

ジラーイには油断は出来ない。絶対に。

油断はすぐに命取りになる。

それがジラーイ。それがイヴァン＝ブラギンスキ。

「そろそろいつちからも動かないよね」

「そうだな」

兄ちゃんはそのまま黙り込んだ。

どう動くかが勝負だ。

俺はこれ以上仲間を殺されたくないんだ。

じゅうわ。(後書き)

これから他の組織をどんどん出していきます。
キャラが多すぎて上手く動かせないかもしれないです(汗)
だけどがんばります!

じゅりこひさ。 (繪書丸)

遮那が出でましめたーーー。

さひこひじゅじ。

「へラ、居るか?」

怒られた後、部屋の中でじいじしていったつむにかけられた声は、
ルートの物。

「居るよー」

「今から少し出かけるのだが、いいか?」

「ん、分かった。ちょっと待ってて」

外に出られるよつの格好に着替え。

「行けるよ

「行く場所は街中だからな、私服か?」

「……ごめん、もうちょっと待って

仕事だと思ってたので制服(?)に着替えちゃったよ。

その後、うち等は街に出た。

そしたら。

「あこつは……バッシュか?」

「やうみたいだね。誰かを追いかけているみたいだけど
よく見ると追いかけられているのは菊さん?」

なんで追いかけてられるんだろう。

「あの髪の色。遮那の一員か?」

「え?」

「説明してなかつたか?三つあるのがの一つ、」

「いや、じめん。思い出した。説明してたよ。でも」

「でも?」

「菊さんもマフィアなんだ……」

「誰だ?」

「ヘタリアの世界で、日本をいつて書つていた等の祖国」

そう言つた所で、セダーンツーと独特の銃声が響いた。

そしてその銃弾は、菊さんの肩近くに当たつたようだつた。

「助ける?ルート」

祖国とは離れ、ソーリーはマイファイアとして行動しなくちゃならない。

「助けよつ。菊、と言つたか。あいつが本当に遙那なら、」

「じゃ、話は後でつー。」

菊さんとバッシュ・ショービルとビルとの間に入つていった。

あの、バッシュ・ショーン。民衆さんが怖がつてるんですけど。

あなた方つて警察、じゃ？

「まあ先に菊さんだね。んじゅルートお願いつー。」

「じべじるなよ、くわー。」

続いてうひ等もビルの間へ。

つけは先回りして菊さんの前へと。

ルートは菊さんとバッシュ・ショウの間へと。

しづらしくして。

「バッシュ、何をしているんだ？」

「この瓶……貴様、ルートヴィッヒかー。」

つづりとそんな声が聞こえた。

よし、後は。

「本田菊さんですね？」

「あなたは？……つ」

「話は後で。まずはバッショから逃げないと、」

「素性の分からない人を信じるわけには行きませんから」

小さな、カチリ、と詰つ音が響いた。

「何か私がついていってもいい、と言ふようなものは無いのですか？」

まあ、そうなるとは思つてたけど。でもなー。

「えーと、ヘラ＝ヴァグナー。R・R幹部ルートヴィッヒ・バイル
シユミットの付き人みたいなものです。これが一応証拠なんですが
ど」

「これは、どうやら本物のようですが、逆効果だと思いますよ」

「ですよねー」

R・Rのバッジを見せたけど、まあ、そうなつた。

銃を下ろしてはくれない。

「貴方は訳ありのようですね」

やつぱりばれちゃいますか。流石祖国。

伊達に長生きしませんね。

「いつの世界ではどうなのか分からぬけど。

「まあバッジも見せてもらつたことですし、助けてもらいましょう」

日の丸の国旗に恥じない微笑をみせ、銃を下げた菊也ん。

「じゃあ、いつかです」

「ひと葉さんはルートと決めた場所に向け、走り出した。

じゅうじゅうか。（後書き）

次は誰が出てきますかね（え

じゅりんぐ。 (前書き)

この世界の薬は30歳の設定です。

じゅりさん。

「まだかな、ルート」

「ルートさん、と書う方……遅いですね」

相手がバッシュコと云ふこともあるのか、ルートはなかなか来ない。

「うち等がここに来てからもう20分近く経つのに。

菊さんが追いかけられていたのは、今何をした、と云ふことではなく、

単にマフィアの幹部、と云ふらしい。

バッシュコさんは昔からの腐れ縁というかなんというか、まあそんな関係らしい。

「あ、あの方ではないですか？」

菊が見た方向には、確かにルートがここに向かつて走つてくる姿。

「会いつてます！ルート、いらっしゃ～！」

「へり、無事か」

「うん、大丈夫。菊さんも怪我はしてないけど一応無事。」

「分かった。 遮那幹部本田菊さんだな？」

「ええ」

「R・R幹部ルートヴィッヒ＝バイルショミットだ」

そう言つたルートは、例のバッジを見せた。

「すまないが、遮那まで案内してもらつていいか？」

「え」

「せつを言つたらう。本当に遮那なら、と」

「えと」

「お前はとつとと先に『話は後で』とか言つて先に言つてしまつた
がな」

「すんません」

苦笑いしながらルートがそう言つた。

「つけはよく覚えてない。ごめんけど。

「失礼ながらルートさんとくらさんは恋人同士なのですか？」

「「え」」

突然菊さんの衝撃発言に、うぶとルートは同時に振り向いた。

「んな訳無いですよつ！」

「何を突然つ、」

「何を突然つ、」

そのまま、二人で必死に否定する。

まあ、確かにルートはヘタキャラで一番好きだけども、

……かつこいいけどさ。

ルートには、もつと大人の

「おい、へラ？」

「すみません、からかい過ぎてしましましたか？」

考えていると、一人が声を掛けてきた。

ああ、いきなり黙つたからかな？

「いや、うちは大丈夫、です」

「本当か？ ならいいんだが」

「ルートさん、貴方……」

少し呆れたような声をだす菊さん。

何を考えていたのか分かつちゃった、のかな。

「？ なんだ？」

「何でもあります。まあ、へらわん、じやがりです」

「へ？ ひおわっ」

手首をつかまれ連れて行かれる。

ルートまでは行かないまでも、菊さんは意外と力が強かった。

「お、おこつ？」

ルートを置いて早足で歩く菊さん、引っ張られてるひが。

ルートは慌てて後を走ってきた。

「おや、来られるのですか？」

「当たり前だ、へらを一人には出来ないのでな」

「何故ですか？」

「何故つて……未成年だし、入ったばかりと言つのもあるし、へらには色々と事情があるからな」

「ああ、わつですか？」

また菊さんは早歩きを始めた。

「私の腕をつかんだままで。

「菊、さん?」

呼びかけると、菊さんはいつの間にか微笑んで

「ちょっとした爺のお節介ですか?」

と、小さこ声で言つた。

「はあ……」

良く分からぬけど、放してくれそうもないし、このままでいいか。

それにしても菊さん「爺」といふ世界で貴方何歳なんですか?

(後書き) おひるひよじ。

普通30が節つて言わないけど、癖ですか。いろいろ秘密があるんですね。多分。

じゅうせん。 (前書き)

遮那グループと接触です。

しかしメンバーは一人しかでてこない。

じゅうせざわ。

「 ジュウセザワ

菊さんに連れられてきた場所は、小さなアニメイト的な場所だった。

「 菊、どうこいつだ？」

「 ふふ、騙されたと思って中に入りこんだぞ」

「 (めわか) の世界でアニメイトが拝めるとほ……)

菊が扉を開ける。そこには、元の世界でよく見たアニメキャラたちが並んでいた。

それに店舗自体もアニメイトそのものだ。

「 (クタコアはねえ) を探ししても無い)

少なくとも (ジュウセザワ) の世界は日本のイメージではない。

なのに、何故こんなに元の世界の物が再現されているのだらうか。

不思議に思つたが、菊さんに呼ばれ、奥へと向かう」とした。

「 電文庫の新刊とスーカー文庫の新刊を合わせて20冊くれますか？」

「はい、では」ひらい

すると、扉がゆっくりと開いた。

「こちまよ、お二人供」

「は？」

「じいが、遮那本部入り口です」

菊さんはいつも振り返ると、そう、告げた。

扉に向ひては、闇が広がっている。

「……行くぞ、へラ」

「分かつた」

問いかに頷く。そして、改めて菊さんについて行く。

「耀さん、いらっしゃいますか？」

「アニキは今出かけてるぜー」

「そうですか、今どひらい？」

「知らないんだぜ。それより菊、そいつら誰なんだぜ？」

「ああ、私の恩人です。バッシュさんに追われていたところを助けていただきまして」

「やつぱり菊はドジなんだぜ」

「ええ、そうですね」

菊さんが呼びかけた先に居たのは勇洙だった。

予想通りの菊さんにに対する敵対心、というのかなんなのか。

菊さんに喧嘩を売つていて、菊さんはそれを受け流していた。

大人の余裕といつやつか。

「あー、ちよつといいか?」

「なんだぜ」

「お前と菊は仲間のなのは……」

「冗談が居るから」に附るだけで別に菊は仲間じゃないんだぜ」

「……そつか」

まあ最初はそういう反応だよね。

「つちもそつだつたし。

「それにしても困りましたね、耀さんが居ないとなると

「ああ、ボスが居ないのか」

「すみませんが、また都合のいいときでよろしいでしょうか？」

「俺の電話番号を渡しておくから、電話してくれないか？」

「いいんですか？ 私がそれを他に売る可能性もありますが」

「俺のプライベート用の電話番号だ。それを売つても俺達には関係が無い。危険が及ぶのは俺だけだ。それに、俺の電話番号を卖つたのならば、俺がここへ今日来た目的は無くなる」

「……そりですか。わかりました。では、まだご連絡します」

菊さんに見送られ、うちとルートは外へ出た。

「結局、今日『遮那』に行つた目的はなんなの？」

「ん？ ああ、フュリシアーノに『遮那』と同盟を結びたい、と言わ
れてな」

「できるところ、同盟」

「そうだな。菊はいい奴だ。実を言つて、信じたいから、俺の電話
番号を渡した」

「大丈夫だよ、きっと」

「信じよつ。へラ、何か食べて帰るか？」

「まじでっ！？ じゃあ行こ！」

ルートの手を取つて走り出す。

遮那との同盟を結べるかどうか、まだわからぬけれど。

きつといい結果になると、それを信じて。

じゅうせきわ。（後書き）

アニメイト、とか現実の世界のものが出来るのは仕様です。
後々物語に深く関係する……はずです。

じゅりんざわ。(繪畫)

遮那のターン！！

じゅうせんざわ。

「耀さん、お帰りですか」

「ああ、菊帰つてたあるか」

「はい。耀さん、面白い話があるのです。聞きませんか？」

「……今日何かあつたあるか？」

少し呆れたような顔をして、王耀 私達「遮那」のボスは話しかけてきた。

無理も無いだらう。顔がにやけているのが自分でも分かるほどだから。

『『R・R』から、使いが来ました』

そつ、告げて。私は表情をくき締める。

「とつとつ来たあるか。菊はどう思つてこるある？」

「本田菊、としてだけでなく。遮那幹部としても申し上げます

『『R・R』と同盟を結ぶべきだと』

「……いつも一次元でしか意見を言わない菊が言つなら本物あるね

「失礼な。一次元以外でも言つ時はありますよ」

苦笑いをして、引き締めた表情に戻す。

「個人的な感情も大きいんですけれど。遮那幹部と知つて取引を持ちかけてくるとは、なかなか度胸のある方ですよ」

「ようじょひつじにあるか」

「ええ。これです」

一枚の紙を取り出す。それは、今日貰つた、『ルートヴィッヒ』の電話番号が書かれた物。

「電話番号? それがどうしたある」

「今日あつたばかりの、しかも敵かもしれない私に渡すものですから。少し残念に思つていたのですが。予想以上を言つてくれました。」

二人の顔を思い出し、その言葉を告げる。

「これは俺の電話番号だから、売つたとしても俺達はダメージを負わない。そして、今日俺達は来た意味は無くなる、と」

「同盟を結ぶ価値は無い、ということあるな」

「そして、それが広まれば、私達には『同盟を結ばれなかつた、価値がないマフィア』といつ汚名が付いてしまうでしょう」

「そうあるね。まあそのくらい我にとつては大丈夫あるけれど」

耀さんはにこりと笑みを浮かべた。

「だけど若いのにそれだけ考えられたら十分ある。同盟を結ぶ価値はありそつあるな」

「では、同盟を結ぶ、と言つ事で？」

「いいあるよ。明日でもこいある

「あつがとうござります。では私のほうから連絡しておきますので」

「わかつたある

「それでは失礼します」

扉を開け、部屋から出る。そして、携帯を取り出す。

もちろん、携帯はプライベート用の物だ。

「……ルートヴィッヒさんですか？本田菊です。私達のボスは明日にでも会つてみたい、と言われているのですが。……ええ、では明日、面過ぎに。 それでは失礼します」

通話を終わらせ、携帯を閉じる。

「明日が楽しみですね」

薄く微笑んで、自分の部屋に戻る。

「私達を」こんなにドキドキされる方はやられませんから」

月が綺麗な、この夜が。いい事のある、暗示でありますよつて。

じゅりみさわ。（後書き）

キャラがぜんぜん出てこない……だと……

じゅうじゅうさん（前書き）

同盟組、ルート&ヘラ視点です。

おひるね。

「おこしにか？」

「めつちや美味しい！」

「……年頃の女が美味しい、とか言つもんじやなこと思つたわ」

「まあそれがうちだから」

「ひげとルートが行つたお店は、ラーメン屋。

帰り道、いい匂いがしたので寄つてみたのだ。

「（ちうごえば、）遮那に近いから……ラーメン屋とかあるのか
か？」

少なくとも、R・Rの近くにはラーメン屋なんて一軒しかないはずだ。

だけど、遮那を出てからすぐにはあつたことを念む、よく周りを見渡す。

結構ラーメン屋があつたのだ。中華料理店とか、寿司屋とかも。

違和感を感じる。

「（ひこせ、）ヘタリアのキャラ達が国だといつ概念はないはずだ。

それなのに、綺麗に分かれすぎているのだ。

「くら？ どうした？ 食べられないのか」

「ううえ？ あー、いや大丈夫。考え方してただけ」

ルートに声をかけられ、はつ、と気がつく。

まだラーメンは残っているのに考え方をしていたので、ルートは心配してくれたようだ。

「そうか。冷めないうちに食べたほうがつまこと悪いわ」

「うん」

頷いて、続きを食べ始める。

だけど、せつを覚えたことはまだ頭に残っている。

「日本」である菊、「中国」である耀。所属している組織、「遮那」の近くには日本・中国料理店をはじめとしたアジアっぽい店が並んでいる。

うち達が最初に飛ばされてきた、「ドイツ」であるルート、「イタリア」であるフヨリ、ロヴィが居る組織「R・R」の近くには、ヨーロッパらしい店が並ぶ。

しかし、同じヨーロッパであるはずの「フランス」らしい店は無い。

それに呼応するかのよつて、「R・R」は「フランス」である
フランシスは居ない。

いかにも、うち達の記憶に合わせたと言つ様。

「（なにか、帰れる秘密があるのかも知れない）」「

そこには、うち達の世界へと繋がる秘密があつて、うち達は帰れる
かもしれない。

その時には、この世界はなくなるだろ。

「（彩花先輩に報告した方がいいよね）」「

ラーメンを食べ終わり、箸を置く。

「うひそりやめ

「美味かつた。また機会があれば来る」

一人で席を立ち、ルートはお金を置いた。

「今度は母親も連れてきて食つてくれやー」

店を出る際、ラーメン屋の主人が大声で声をかけてきた。

もしかして、うちルートの子供だと思われてる！？

「どーせうひは小さいし……」

「あー……フフ? 気を落とすな

「あーー」

そういうながらも結構気にしてることなので、肩を落とす。

わざして、何分か歩いてくると。

突然、ピリリリ、ヒルートの携帯の着信音が鳴った。

「……誰だ?」

登録している番号からの電話ではない。

小さく呟いたルートの言葉から分かった。

び、と通話を開始させ、うめとルートは立ち止まる。

「 その声、菊、か

眩やかれた声に少し緊張感を出す。

その電話は、菊さんから ?

「ルート、」

いへり、と頷いている

菊さん、だ。

「……分かった。明日の面過おもてだな。　ああ、では失礼する」

ふつ、と電話を切った。そして、振り向いて。

「明日、面過おもて。『遮那へな』へもつ一度行くおも」

モウルートは告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7125v/>

マフィアな国、ですか？

2011年11月26日20時45分発行